

コメント

モストー ジョシュア

私が小学校低学年の頃に使っていた教科書の一冊は、「ピクショナリー (pictionary)」と呼ばれていた。その教科書はもう手元になく、内容もたいして覚えていないが、大変楽しい本だったことは記憶にある。福田先生が「絵引」にあたる英語はないと言われたのは確かにその通りだが、私がこれからする話の中では「ピクショナリー」という言葉を使おうと思う。

日本には、ピクショナリーに類似するジャンルでは特に昔から豊かな歴史があるようだ。地理的な特徴を分類する習慣は、もちろん『風土記』の中に見ることができる。私自身は8世紀初頭に作成された『風土記』の視覚的要素には気づかないが、『風土記』は大嘗祭のための『悠紀主基屏風』の作成に用いられるようになった。屏風に特定地域を描くという『悠紀主基屏風』で用いられた方法は、少なくとも10世紀に遡ることができる。もちろん、もっと一般的には「名所絵屏風」や、詩歌のテーマである「題」を扱った図典（ビジュアル・ディクショナリー）として用いられた「月並屏風」もある。最後にあの有名な、後白河院（保元～治承、1156～1181年）の『年中行事絵巻』もこのジャンルのものである。

中世には、「職人歌合」や、各種の動植物・魚類・鳥類の絵が描かれた「貝合わせ」のような様式も登場した。近世初期のものには、1666年に中村惕斎が編纂した『訓蒙図彙』がある。これはもちろん、それ自体でひとつのジャンルをなしている。こうした様式や書物の登場について、私は以前に、近世初期における視覚イメージの「語彙化 (lexicalization)」と説明したことがある。こうしたジャンルが登場したことでビジュアル・ボキャブラリー（視覚的語彙）が作りだされ、国民全体がその多くについて共通理解をもつようになった。もちろん、これらは、神奈川大学の絵引プロジェクトが想定しているものともかなり異なっている。

福田先生は「絵日記」について言及された。確かに「絵日記」は平安の昔に存在した証拠がある。『蜻蛉日記』の作者である道綱の母が日記をつけていたことは疑いない。しかしこうした日記には、職業芸術家ではない一般人がたやすく取り入れられる約束事が必要になる。このように約束事が必要になったことが、平安時代の「女絵」の起源だと主張する人もいる。女絵が絵日記と物語絵の両方に用いられていたため、これらを歴史資料として用いるとどのような問題が起こるか想像できる。

福田先生の説明の通り、「図絵」もまた事実と想像の組み合わせであり、そこには架空の風景や想像で描かれた歴史的場面が多く含まれている。これに該当するものとして、江戸時代にも『伊勢物語図絵』や『百人一首図絵』と題されたものが刊行されている。確かに、『東海道名所図絵』の説明文は名所旧跡を賞賛するためのもので、Fodor's社やロンリー・プラネット社の旅行ガイドのようなものである。神奈川大学の「絵引プロジェクト」では、使われる資料を誇張表現として分析することは避けられないであろうと考える。つまり、分析の対象は、その資料が述べていると秋里籬島や竹原春朝齋のような作者や芸術家が考える内容なのである。福田先生は「図像は偶然記録である」と言われたが、この「偶然性」と、こうした図像が最初に描かれた目的の分析とのバランスを取りたいものである。

しかし、こうした制約があるにもかかわらず、福田先生の後に発表された田島先生の、『農業図絵』の挿絵に関する優れた考察から学べることを理解すれば、感銘を受けるのは確実である。田島先生は、いわゆる

「常民」だけが分析対象になるのは残念だと言われたが、私も同感だと言わざるをえない。このような限定は民俗学研究の時代遅れの偏見である。それに澁澤も自分の作ったルールを守らなかった。というのも、『日本常民生活絵引』は『餓鬼草紙』を資料として用いることで確かに貴族を含んでいるからである。一方、田島先生は明らかに、常民以外の階層や社会分野を加えなければ、今のままではプロジェクトは困難だと感じておられる。

しかし私が大変興味深く感じたのは、衣類が実際はどう着用されていたか、眉毛はそり落とされていたかどうか、橋とタバコ商人の関係はどうだったかなど、田島先生が提示された疑問の数々である。こうした疑問について図像を確実な証拠とするには躊躇があるが、図像は興味深い問題を提示してくれるし、物的証拠であれ言葉の証拠であれ、裏づけとなる証拠を探そうと注意深くなるものだ。

これらの図像を「読み解く」ために知る必要がある建築、商業、農業などのさまざまな分野に目をやると、神奈川大学の先生方が着手された事業の壮大さが感じられる。そして、田島先生のご指摘どおり、日常生活について多くの知識が失われているのが分かる。このため私は、神奈川大学の絵引プロジェクトが過去に注目するのではなく、20世紀の「絵引」から編纂を始めればどうだろうか考える。ある日本人大学院生に、終戦直後の1946年に日本で出版された一冊の本を見せたときのことを思い出される。その本は謄写版で印刷されたもので、その日本人学生はそんな言葉を聞いたことがなかった。私と同世代の人には馴染み深い印刷機械の多くが、今では姿を消してしまっている。先月、私は母を連れてファックスと留守電機能のついた電話機を買いに行ったが、1機種しか見つからなかった。ファックスが急速に姿を消し、スキャンした文書を電子メールで送る方法に代わりつつあるのは明らかである。

そこで最後にもう一度「常民」という言葉に戻る。澁澤のような学者がこの言葉を使った理由は明白である。「常」が「普通の」という意味だけでなく、「常なる」という古語が「永久の」という意味であり、ひいては「常民」が「変わらぬ民」を意味するからだ。しかしもちろん、皆さんご承知の通り「変化が世の常というもの」である。私たちの研究は短い期間の中で行われているが、この短い期間の中では伝統や歴史、はかなさの違いがますます曖昧になるように思える。それでも、私個人は神奈川大学の絵引プロジェクトから大きな感銘を受けているし、このプロジェクトに感謝している。このプロジェクトが成功裏に完成することを期待している。